

高知精神保健

発行所 高知市丸の内1丁目2-20
 高知県地域福祉部障害保健支援課内
 高知県精神保健福祉協会
 電話：088(823)1111・088(823)9669(直)
 FAX：088(823)9260
 E-mail：kochi-mhwa@mopera.net
 発行人 数井 裕光 編集人 谷 晃

第275号

「高知県における子どもの心の診療ネットワーク事業について」



高知大学医学部寄付講座
 児童青年期精神医学 特任教授 高橋 秀俊

近年、発達障害、不登校、虐待、災害対策、家庭問題など、子どもの心の問題の増加にともない、子どもの心の診療体制の充実が、ますます求められています。子どもの心の診療の特徴として、ひとりの子どもが複数の発達障害や精神障害を合併し、発達のさまざまな領域に困難を抱えていることが多く、ひとりひとりの子どもによって、支援ニーズが異なること、本人だけでなく家庭全体への対応が必要になるケースが多いことなどがあり、医療、教育、福祉、司法など多職種・多機関の地域連携が不可欠です。

令和2年7月より、高知県でも「子どもの心の診療ネットワーク事業」が開始しました。「子どもの心の診療ネットワーク事業」は、様々な子どもの心の問題、児童虐待や発達障害に対応するため、平成20年度に厚生労働省のモデル事業として「子どもの心の診療拠点病院機構推進事業」としてスタートし、平成23年度より現在の名称に変わり、さらなる事業の拡充とより良い診療体制をつくるため本格的に実施されています。令和2年12月1日現在、高知県を含む1都1府18県1政令市が、この事業に参加し、行政の管轄や機関の壁を越えた支援の連携をもとに、地域の実情に合わせたさまざまな施策が行

われています。高知県では高知大学医学部が拠点病院として委託され、発達障害、うつ、摂食障害、不登校、自殺・自傷、虐待、親の精神科的課題、身体合併症など、子ども（主に小学生～高校生）の心の診療のニーズの高い事例に早期に円滑に対応するために、県内の医療・保健・福祉・教育など関係機関と連携した専門的な地域支援体制の構築を図ります(図1)。

高知県の子どもの心の診療ネットワーク事業の内容を表1（P2右上）に示しました。(1)の地域連携体制の構築に関しては、令和2年9月14日までに、県内の5福祉保健所で各地域の子どもの心の

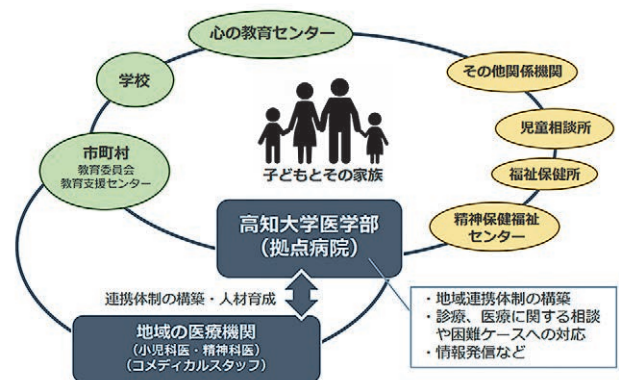


図1. 高知県の子どもの心の診療ネットワーク事業の概要 (高知県地域福祉部障害福祉課作成図を改変)

目次

高知県における子どもの心の診療ネットワーク事業について … 1	第28回日本精神科救急学会学術総会報告 …… 5
COVID-19のアルコール依存症患者に及ぼす影響 …… 2	精神保健福祉ボランティア学習会 …… 6
令和2年度 高知県精神保健福祉関係機関連絡会 …… 4	高知県福祉活動支援基金助成事業 …… 6

診療に関するヒアリングを行いました。また、拠点病院に令和2年7月より専属のパートタイム非常勤心理士1名、令和2年11月よりフルタイム非常勤ケースワーカー1名を配置し、拠点病院と県内の関係機関と円滑な地域連携体制を構築いたします。そして、医学部寄附講座児童青年期精神医学、高知地域医療支援センター、高知医療再生機構など高知大学の他事業と連携し、人材育成を行います。(2)の相談会及び研修会は、圏域別に実施いたします。令和3年度から幡多福祉保健所の子どもの発達障害支援を開始できるよう調整中です。また、各圏域の求めに応じ拠点病院から精神科医、心理士、ケースワーカーを派遣し、県内の圏域ごとの症例検討会を実施し、令和2年10月には幡多福祉保健所圏域、令和2年10月と11月には中央西福祉保健所圏域で精神科医を派遣し実施しました。令和2年9月25日には、WEBセミナー・シンポジウムを実施しました。(3)の地域住民への情報提供に関しましては、令和2年9月に高知大学の医学部寄附講座児童青年期精神医学のホームページを開設し、子どもの心の診療に関する情報を提供します。また、中央拠点病院(国立成育医療研究センターこころの診療部)がホームページに作成する「子どもの心の診療機関マップ」への掲載許可を得た医療機関の診療内容等を取りまとめて掲載いたします。令和2年10月に子どもの心の診療機関マップに関する県内の医療機関へのアンケート調査を実施し、令和3年2月に高知県内の情報が子どもの心の診療機関マップに掲載される予定です。

子どもの心の診療では、家族や地域社会とのつながりが大切で、医療・福祉・教育など幅広く、地域ベースで多領域によるライフステージを通して切れ目のない支援を継続する体制整備が重要です。今後も引き続き、関係機関の皆様のご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。

表1. 高知県の子どもの心の診療ネットワーク事業

(1)地域連携体制の構築

- 県内の関係機関による地域連携体制を構築するため、地域の小児科医、精神科医、コメディカルスタッフ、養護教諭、保健師などの関係者による協議の場を設置。

(2)相談会及び研修会の実施(圏域別に実施)：

- 子どものカウンセリングや心理検査、子どもの診療又は支援にあたる者に対するケース相談や助言を行い、必要に応じて、地域の医療機関への診療支援や患者紹介を実施。
- 子どもの診療又は支援にあたる者を対象に、子どもの心の診療に関する最新の医学的知識や困難事例対応などの研修または模擬事例による症例検討を実施。

(3)地域住民への情報提供：

- Webサイトなどを通じて、子どもの心の診療に関する最新の情報や、子どもの心の診療機関マップを提供。

COVID-19のアルコール依存症患者に及ぼす影響 —飲酒状況および精神的ストレスについて—

下司病院 山本 道也

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は2020年2月より日本でも発生し、3月から4月にかけて急速に全国に感染拡大し、4月16日には全国都道府県に緊急事態宣言が出された。未知のウイルスに対する不安や恐怖感から病院への受診控えもあり、様々な非感染性疾患の治療にも悪影響が出ている。コロナ禍にある今、アルコール依存症の治療状況も悪化する可能性があり飲酒状況の変化やストレス内容について調査する必要があると考えられる。

今回、6月15日～7月10日の期間に当院で診療したアルコール依存症患者313例(外来262例/入院51例、男性264例/女性49例、平均年齢60±12歳)を対象にアンケート調査を行なった。但し認知症の患者は除外した。

アンケート内容は、現在の飲酒状況、飲酒欲求の変化、COVID-19によるストレスの有無および生活面・精神面への影響、仕事への影響などについてで



ある。入院患者においては入院するまでの状況を問診した。

【アンケート調査結果】

1)現在の飲酒状況

- 飲酒継続(1ヶ月未満の断酒)群: 99例(32%)
- 1ヶ月以上～3ヶ月未満断酒群: 28例(9%)
- 3ヶ月以上～6ヶ月未満断酒群: 21例(7%)
- 6ヶ月以上～1年未満断酒群: 28例(9%)
- 1年以上断酒群:137例(44%)

2)飲酒欲求の増強と飲酒状況(図1)

- COVID-19による飲酒欲求増強群: 55例(18%)
 - 飲酒: 28例(9%)
 - 断酒: 27例(9%)
- 飲酒欲求に変化がなかった群:258例(82%)
 - いつもの飲酒欲求→飲酒: 90例(29%)
 - いつもの飲酒欲求→断酒: 11例(4%)
 - 飲酒欲求なし→断酒継続:157例(50%)

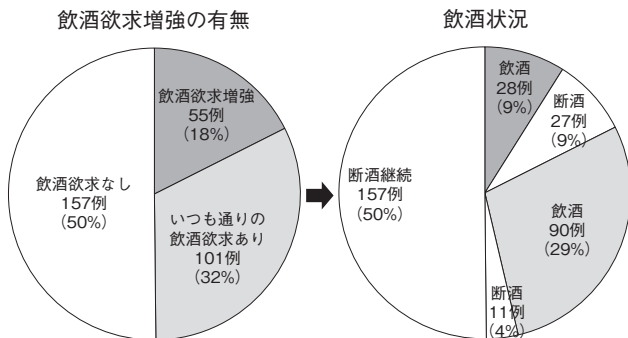


図1 COVID-19による飲酒への影響

3)ストレスの有無とストレスの内容(図2)

- なんらかのストレスあり:194例(62%)
- ストレスなし:119例(38%)

ストレスの内容については頻度が高いものから、人に会えない(29.4%)、不安・恐怖感(25.6%)、閉じこもり・出られない(24.3%)、イライラ感(21.1%)、気分の落ち込み(18.9%)、仕事が減った(11.8%)、やることがない(11.8%)、家庭環境の変化(5.4%)などであった。

4)グループ別にしてストレスの頻度を比較(図3)

a)飲酒状況によりストレスの頻度を比較

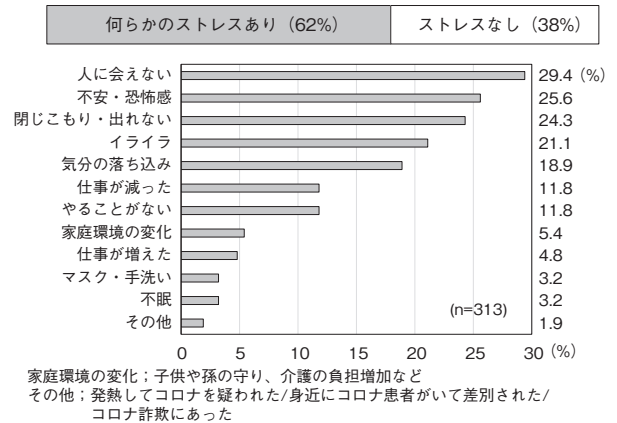


図2 COVID-19による生活面・精神面でのストレス内容とその頻度

飲酒状況を5つのグループに分けてストレスを感じる頻度を比較したが群間に差はなく、飲酒継続群(99例)と6ヶ月以上断酒群(28例+137例)で比較してもストレスを感じる頻度には有意差がなかった。ストレスの内容については飲酒継続群において、気分の落ち込み、イライラ感、やることがないという項目について有意に高率であった。

b)飲酒欲求増強の有無とストレスの頻度を比較

飲酒欲求増強群においてはストレスを感じる頻度は96%で、飲酒欲求に変化がなかった群では40%であり、飲酒欲求増強群において有意に高かった。ストレスの内容においてもほぼ全ての項目で飲酒欲求増強群において有意に高率であった。

c)生活環境の違いによるストレスの頻度を比較

1人暮らし群ではストレスを感じる頻度66%に対し、2人以上暮らし群では40%であり、1人暮らし群で有意に高かった。ストレスの内容では、1人暮らし群で、不安・恐怖感、やることがない、マスク・手洗いのストレスの頻度が有意に高く、2人以上暮らし群では家庭環境の変化によるストレスが有意に高かった。

d)仕事の有無とストレスの頻度を比較

仕事あり群(122人)、仕事なし群(191人)で、ストレスを感じている頻度はそれぞれ63%、61%で有意差はなかったが、細かく仕事の状況を分けて検討すると、COVID-19により仕事量の変化した(仕事が

増えた、減った、無くなった) 群において、仕事量が変化しなかった群やもともと無職の群に比べてストレスを感じる頻度は有意に高かった。

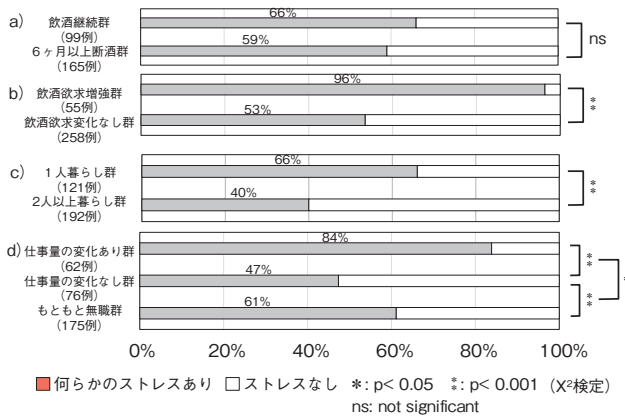


図3 グループ別にしてストレスの頻度を比較

【考察】

今回の調査によってアルコール依存症の約2割の患者において飲酒欲求が増強し、約1割の患者がCOVID-19によるストレスで飲酒していることがわかった。特に1人暮らしの人、COVID-19により仕事量が変化した人や飲酒欲求が増強した人において生活面・精神面でのストレスは高まっていることが明らかとなった。

今後ウィズコロナの時代においてストレス負荷は慢性的にかかるであろうと思われ、アルコール依存症患者の飲酒リスクはさらに増大し、病状の再燃や悪化が懸念される。

特集「コロナ禍の精神保健福祉_2」

令和2年度 高知県精神保健福祉関係機関連絡会

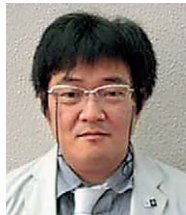
例年開催している表記連絡会も本年度は開催することができず、団体から文書で当年度活動計画(以下A)と新型コロナウイルス感染症における影響(B)を提出していただき、それを配布することで「連絡会開催」に代えさせていただきました。以下抜粋してご紹介します。(ただし令和2年8月時点の内容)

<p>1. 高知県社会福祉協議会</p> <p>(A) 高知県災害福祉支援ネットワークが、令和2年9月24日に設立され、一般避難所に派遣する災害派遣福祉チーム(通称:DMAT)の人材養成のためのチーム員登録研修を行う。</p> <p>(B) 生活福祉資金特例貸付の増加、ふくし交流プラザ・障害者スポーツセンター等の利用停止、各種研修・子ども食堂・スポーツ大会・ふくし総合フェア等のイベント中止</p>
<p>2. 高知いのちの電話協会</p> <p>(A) 相談員が9名増え、更に繋がるダイヤルを目指し、不在日解消や電話相談員定着等に引き続き取り組む。</p> <p>(B) 第20期養成講座(14名)を4月4日から開講したが、4月11日から養成講座・継続研修を休講し、5月9日から再開。全国大会と県外研修は1年延期。</p>
<p>3. 高知県精神障害者家族会連合会</p> <p>(A) 活動の目的=当事者や家族とのつながりを作りつつ、日常の定期的な見守りを行いながら必要な支援につなげる。ピアサポーターの重要性に着目し、専門員養成を要求していく。</p> <p>(B) 県内4ブロックでの研修は中止あるいは小規模での開催。</p>
<p>4. 高知県精神障害者地域生活支援施設連絡会</p> <p>(A) 7月17日研修「権利擁護の視点から障害者虐待を考える」講師:もえぎ作業所施設長 田村孝子氏、11月27日「発達障害の対応について」高知ハビリテーションセンター長 西岡由江氏</p> <p>(B) 高知県「社会福祉施設における新型コロナウイルス感染者の発生に備えた相互支援ネットワーク」参加。</p>
<p>5. 高知県精神保健福祉士協会</p> <p>(A) ホームページで当協会内外に向けての活動報告・情報発信を行っています。</p> <p>(B) 書面決議となった総会以降は、必要な会議(三役会、運営会議等)、各委員会活動について十分な感染対策を行いながら開催するとともに、WEB会議の活用も推奨しながら活動を再開している。</p>
<p>6. 高知県断酒会連合会</p> <p>(A) 高知県内4団体(高知県断酒新生会、高知県断酒友の会、南四国断酒会、幡多断酒会)の連合組織で、相互の融和を図る。正会員60名とその家族で構成。</p> <p>(B) 依存所ピアネット「スーパーねっと」の「アルコール依存症Zoomミーティング」のオンライン例会が先駆けとなり、全国各地にオンライン例会が立ち上がり繰り返されていることは明るい出来事。</p>
<p>7. 高知県臨床心理士会</p> <p>(A) 例年通り会員対象の研修と、他機関と連携しての活動を多種多様に展開。一部研修をWEB開催を検討中。</p> <p>(B) スクールカウンセラー関係での勤務変更発生。内部会議ではZoom利用。研修開催にも感染予防を配慮した内容を検討。</p>
<p>8. 日本精神科看護協会高知県支部</p> <p>(A) 「こころの健康を通して、だれもが安心して暮らせる社会をつくる」理念のもと活動計画をたててきたが、今年度は研修・講演会を三密をさけるためやむなく中止・延期している。</p> <p>(B) 協会本部からのWEB研修は随時開催されており、HPで広報している。</p>
<p>9. 高知県精神保健福祉ボランティア連絡協議会</p> <p>(A) 総会は開催せず、資料を登録会員に郵送。8月5日、当事者中心の交流会「心のびのび 気分ほっこり交流会」を天狗高原で開催、参加者23名。</p> <p>(B) このような状況下、当事者、家族の方がさらに生きづらさを抱えているのではないかと心配している。</p>
<p>10. 高知県精神保健福祉協会(スペースの都合で省略)</p>

第28回日本精神科救急学会学術総会 (2020.10.9-10)(高知大会) 報告

高知大学医学部神経精神科学教室 講師 上村 直人

本年10月9日、10日の両日、第28回日本精神科救急学会学術総会が大会長、数井裕光教授（高知大学神経精神科学講座）、副会長、須藤康彦院長（土佐病院）の担当で開催されました。新型コロナウイルスの影響でWEB開催となり、せっかくの高知の秋の観光や食材を楽しむために全国から高知に来ていただくというおもてなしはできませんでした。



当初はこのご時世で大会開催自体が危ぶまれましたが、大会長の英断や学会理事会の支援などもあり、WEB開催という全く初めての方式での開催となりました。参加や視聴された方はご承知のとおり、現地開催のようにアナウンスあり、座長あり、質疑応答ありで、現地開催と遜色のない学会だったと言われホッとしました。

学会の中身は非常に内容も濃く仕上がったと思います。シンポジウムは6つでコロナ感染症、高規格病棟、認知症、児童・発達障害、南海トラフ地震と災害精神医学、多様性的な依存症の問題を取り上げました。教育研修では京都大学の村井先生と救急学会では重鎮の計見先生のディスカッションは大変貴重な機会でした。

またこれまで本学会で継続されてきた、救急医療から精神医療へのつなぎを目的の一つとしているPEEC (Psychiatric Evaluation in Emergency Care) の普及啓発活動とは、逆の視点のINARS (Immediate Nursing Assessment Recognition Stabilization) 『患者さんを最悪の事態を避けるため



の行動を起こす考え方』を学ぶコースという活動の解説を、土佐病院の看護師の方の提案で試みました。実際の講習会はできませんでしたが、解説と来年への導入目的も兼ねて時間を取ることができ、高知大会での新たなチャレンジを示せたのではと思います。

また一般演題は、精神科救急学会と言ってもやはりコロナ感染症関連が圧倒的に多く、2セッションを取りました。その他認知症や児童関連、司法制度など広範囲にわたる内容でした。

全体をふり返ってみると新型コロナウイルスというこれまで経験したこともないような状況下でありながら、WEB開催方式という学会が成功裏に無事終了できたのも、高知県内の精神医療にかかわる人たちのご協力や支援を頂けた結果であったと思います、事務局長としての感謝と御礼を申し上げます。



精神保健福祉ボランティア学習会

テーマ：「双極性障害とうつ病について
～その特性と対処について学ぶ～」
 日時：令和2年11月28日(土)
 13時30分から15時
 場所：こうち男女共同参画センターソーレ
 5階視聴覚室
 講師：藤戸良輔（藤戸病院副院長）
 主催：高知県精神保健福祉ボランティア連絡協議会

同協議会はコロナ禍の中で不安な気持ちが増大し、ストレスが増えてきている中で、気分障害とうつ病について学ぶ必要性があると考えました。会員以外の一般を含め30名を超える参加。藤戸講師は発病のメカニズム、治療の注意点、患者さんと家族の対応のポイントについて講話し、休憩時間にも参加者に細かく声をかけ、終了後の意見交換では参加者から治療薬の副作用についての意見など質問や発言も多数あり、ボランティアの学習会として大変有意義な学習会となりました。



(講師の派遣は高知県精神保健福祉協会研修部を通じて行われました。)

高知県福祉活動支援基金助成事業 「～精神保健福祉の風～ リハビリセミナー高知 ～学びと対話の4日間～

メンタルヘルスに関する、当事者と専門職が一緒に創る学びの場です。関心のある方どなたでもご参加いただけます。現在、各地で始まっているリハビリ・カレッジのガイダンスに沿って開催します。事前申し込みが必要ですので、興味のある講座を選んで下記のQRコードからお申込み下さい。

- 場所：かるぽーと9階・高知市中央公民館
 (A. 特別学習室、B. 和室他)
 定員：各講座 8名から20名 *講座によって異なります。
 参加費：500円(当日受付でお支払いください。)
 講座内容：
- ◎令和3年1月10日(日) 14時から16時
 A.「新春WRAP(元気回復行動プラン)」 定員10名
 B.「ボディワーク～ココロとからだでイメージしよう」 定員8名
 - ◎1月16日(土) 14時から16時
 A.「オープンダイアログ～対話の言葉につつまれよう」 定員10名
 B.「リカバリーストーリー～みんなの物語を味わおう」 定員8名
 - ◎1月24日(日) 14時から16時
 A.「WRAPわくわくワークショップ in リカセミ」 定員10名
 B.「12ステップとWRAP その新たな地平～すぐに使える実践ガイド」 定員15名
 講師：八谷隆之さん(作業療法士)
 - ◎1月30日(日) 14時から16時
 A.「哲学カフェ～リハビリって何だろう？」 定員20名
 B.「暮らしの中の森田療法」 定員15名
 講師：木村美葉さん(生活の発見の会)

申込方法：QRコードでスマートフォンからお申込み下さい。
 また次のホームページからもアクセスできます。
 ⇒ QR <https://forms.gle/rHNFQ36J1obkgxZ88>



申込に際してお願い
 当日はマスク着用など感染症対策にご協力ください。
 申込後参加が難しくなった場合は早めにご連絡ください。1週間前のキャンセルはキャンセル料をいただきます。(ただし体調不良の場合を除く)
 事情により開催が難しくなった場合はご連絡します。

主催 一般社団法人りぐらっぶ高知 URL: www.facebook.com.riguwrap
 E-mail: riguwrap@gmail.com TEL: 090-1830-6974

